日本クリスチャン・アシュラム連盟

イエスは主なり

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創始されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　'96. 7. 1　104

「喜ぶ者と共に喜び」
ローマ12:15

岡山敦彦

九州アシュラムでは、昨年9月11～12日一泊二日で、J.K.マシューズ師をお迎えして、第30回の記念集会を開くことができました。40名余りの方々が参加してくださいました。マシューズ師を通して語られる神のことばに、参加者一同聞きいったことでした。そして、個人的にも交わりをさせていただき感謝でした。

また、今年2月12日一日アシュラムも開催いたしました。一日の集会ではありましたが、30名の出席者でした。スタンレー先生が来日された時、通訳の御奉仕をされた鍋倉勲先生がすばらしい指導をしてくださいました。そして、今年の第31回九州アシュラムは8月下旬に計画を致しております。

九州アシュラムには、必ず出席される常連の方々や、初めて参加してそのすばらしさに感動され、ぜひこれからも出席したいとの思いに満たされる方々もおられます。

アシュラムに参加される方々は、すべて満ちたりた方々ばかりではありません。むしろ自分ひとりでは到底負いきれないほどの重荷を背負って出席される人もおられます。開心の時に、自分が負っている重荷や苦しみについて話され、神様からの解決を求めて来ましたと話されます。静聴の時に、主からのみことばの励ましと慰めをいただきます。恵みの証しの時には、各人が主から直接いただいたみことばと恵みを話します。その時は証しする者だけではなく、聞く者にも恵みが分かち合われるときです。「喜ぶ者と共に喜ぶ」ことが、私たちの間に実現する時でもあります。

アシュラムの恵みは、集会後にも豊かに溢れます。その一つは、同じファミリーになった兄弟姉妹のことを覚えて祈り合うことです。同じ、ファミリーの人たちは、お互いの誕生日を覚えています。

そして、バースデーカードを出します。集会後の様子や安否を問います。自分が覚えて祈られていることを実感し、主にある家族であることを再確認できるときです。また、返事をいただくと嬉しいかぎりです。求道中の人がバプテスマに導かれたこと、会堂建築が順調に進んでいること、御主人の健康が守られていることなど、主は確かに私たちの祈りに答えてくださる方であるとの強い確信を持つことができます。そして次回のアシュラムでお会いするとき、お互い輝いた笑顔で「イエスは主なり。」とあいさつを交わすことができることを楽しみにしています。

（九州アシュラム委員、小倉中央教会牧師）

スタンレー
ジョーンズ
コーナー

説教者・アシュラム創始者ジョーンズの生涯

J・マシューズ

〝回心〟は彼に神と和らいだと言う意識、自分自身と他者との間の気楽さ、新しい方向、新しい人柄、優雅さと円満さの意識を与えました。

この経験をする前、彼は弁護士の事務所で法律を学び、独りで読書をしようとしていました。しかし、すぐにキリスト教の牧師へと、彼の仕事は全く変えられました。彼はアズベリー大学ーそれはケンタッキーにある小さな、保守的なホーリネス系の学校ですーに通いました。ここで彼は夢中になって学び、証しをしました。ここで彼は聖霊の深遠な経験をしました。ここで彼はインドにおいて宣教師になれと言う明かな召命を受けました。

一九〇七年十月十三日に、メソジスト監督教会の宣教師としてインドへ出帆し、十一月十三日にボンベイに着きました。彼は直ちに、重要なメソジスト教会本部のあるラクナウにおもむき、そこのラル・バグ教会で牧師として奉仕し始めました。彼の感動的な説教は何百人の聴衆をひきつけ、多くの人々が生き生きとした信仰生活に入りました。

一九一一年、才気のある教育宣教師、メイベル・ロシングに出会いました。彼女は英国・オランダ系の出で、クエーカー及びメソジストの伝統に属していました。彼らはすぐに結婚し、二人の間に独り子の娘ユニスが生まれました。彼女とこの筆者は一九四〇年に結婚しました。一九二八年ジョーンズは教会の監督に選ばれましたが、熟考の上謝絶しました。恐らく賢明な決心であったでしょう。

結婚した後、彼らはラクナウから五十マイルの町シタプルに移りました。そこは次の四十年間、彼らの奉仕活動の中心地となりました。ここでジョーンズ夫妻は、教育、宣教、財務、災害救助、補助的な医療サービスとおまけの編集の仕事を担当する、地区の宣教師となりました。ここでスタンレー・ジョーンズは初めて福音宣教の集会に乗り出し、次第に範囲を広げ、ついにはインド全体に及びました。その途中、驚くに当りませんが、彼は生涯を脅かすに至る健康上の危機を経験しました。彼はこの落ちこみから神によって解放されたと感じ、その全生涯に及んだ激しい説教活動の予定を確立しました。

第一次世界戦争の終りに、全く彼独自のやり方を採甲しました。六月～八月の雨期の間、退修し、祈り、学び、五つの講解説教を、集中して注意深く準備しました。それらは印象的な時の話題を扱ったものでしたが、徹底してキリスト教的・福音的でした。

（白川訳）

第九回バルナバ・アシュラム報告

五月二日～四日の三日間、東京日野市、ラ・サール研究所で開催の第九回バルナバ・アシュラムは七十名参加、内四割二十六名が初参加、教職十三名であった。助言者は杉並区高円寺の馬橋キリスト教会新井宏二枚師をお迎えした。

師はその昔、スタンレー・ジョーズ師来朝の折、通訳を勤められたアシュラムの大先輩です。早口で有名ですが、こぼれるような笑顔にユーモア、ゼスチャーたっぷりで参加者を魅了した。特に「いやしと開放」の賜物に恵まれた器で参加者を霊的経験に誘導された。

静聴九十分、細胞・分かち合で九十分を一セットとして四回、ほとんどの人が初めての聖霊経験をするなど、満たされた内に充満の時を迎え、各細胞から一名づつ選ばれた十名の方々が、夫々に「イエスは主なり」と三本指を高くかかげて証され、四日正午、来年の再会を約して散会した。

（日本アシュラム連名理事　石神勇）

第9回・バルナバ・アシュラム

アシュラム生活最良の友
アパ・ルーム
海老沢 宣道 編集
（年6回刊行の日々の糧）
国際的、超教派的、霊的な読物
価300円、〒90円、年2,340円（〒とも）
申込先　〒256 小田原市国府津3-11
振替口座　00110-7-193834 アパ・ルーム
電話番号　0465-48-2010
日本語版は創刊以来45年続行中

東京都目黒区中央町1-21-10
碑文谷教会気付
日本クリスチャン・アシュラム連盟

〈四十年の恵み〉
日本アシュラムの歩み(3)

海老沢宣道

〔第五回全国縦断伝道〕

昭和三十二年（一九五七）二月初めから四月の末まで三ヶ月もわが日本のために割愛して来日されたスタンレー・ジョーンズ博士は、七十三才になられたが、前回にまさるとも劣らぬ心身の健康と霊力に満たされてNCCの要請に応じ、日本宣教百年記念伝道の一つとして、全国各地を巡回された。最初の一週間は東京の都内だけで、十八回の集会を開かれた。今回の最後の集会は四月三十日夜、神田の共立講堂に約二千名の会衆を迎えて、熱弁を振われ多くの決心者を起された。

アシュラム退修会は前回の天城山に於ける第一回の出席者の希望もあって、全国六地区で二泊三日開催され、参加者は第一回（一五〇名）の二倍以上に達した。東京に於ける感謝送別会の席上、各教派の代表者たちを前にした博士は次のような言葉を残された。

「今回の目的は、未信者に福音を伝えるためと、教会の中から信者を外に押し出すためであった。アシュラム退修会は、外に出て行ける信者を養成するために開催したのである。アメリカでは大抵の所で一週間を、インドでは一ヶ月を生活を共にして守るが、日本では三泊四日が最も長い。日本人は器用だから、短日時の間に十分に養成されるであろう。この祈祷生活運動が日本の国土に根を下ろして成長するよう切に祈る。

尚日本の教会に希望することは、次の三点である。

一、全てのキリスト者は、毎朝静まって祈りの時を持つこと。

二、祈りの細胞（仲間、グループ）を各地に作ること。

（朝祷会もその一つの型である）

三、未信者のために祈り、訪問伝道に力を尽くすこと。」以上。

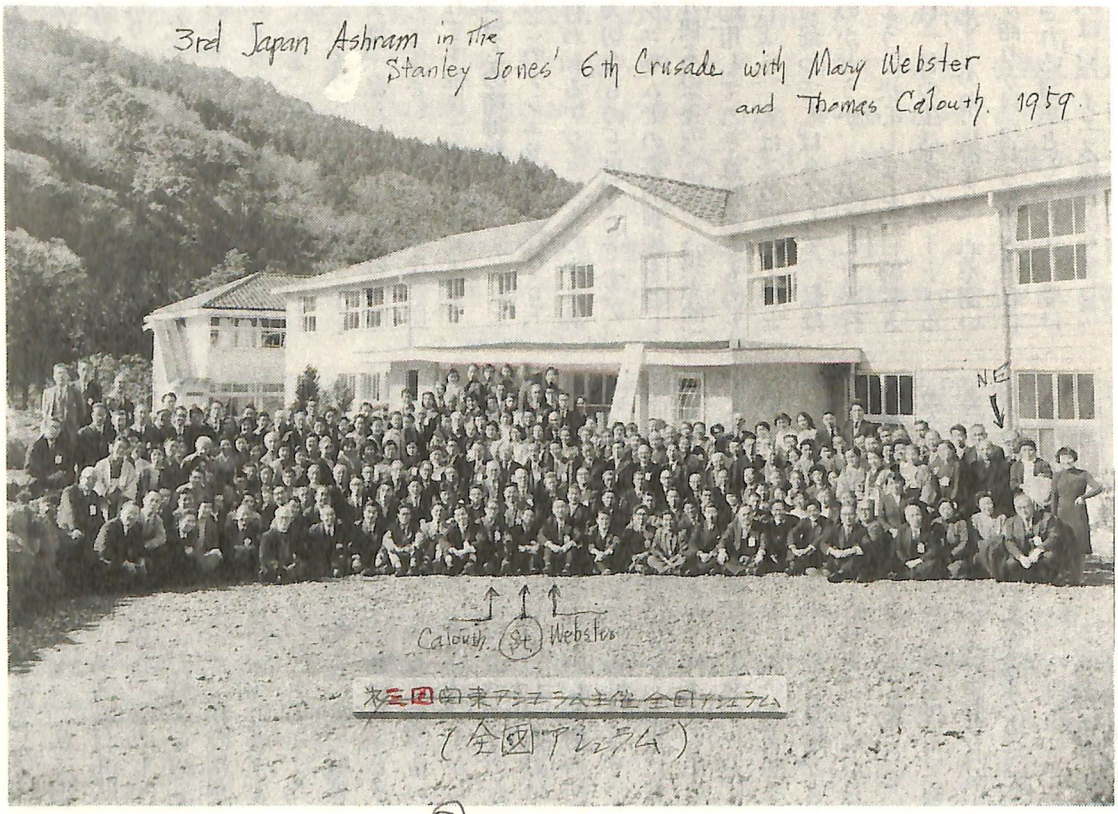
〔第六回全国伝道〕

昭和三十四年（一九五九）にも博士は寒い二月初めから四月初めの二ヶ月余を日本に来られ、七十五才の老軀を捧げて全国各地を巡回された。

今回の特色は、祈祷生活の指導者としてトーマス・カルース博士、訪問伝道の指導者としてアキハバル・ハック博士、博士の秘書兼立派な証し人のメリー・ウエブスター女史の三名を同伴されたことである。

二月九日夜、東京の共立講堂における各教派連合の全東京キリスト教宣教大会には三千名近い大会衆が集まり、博士の信仰的メッセージに心を打たれた。また十一日から天城山荘で守られた全国アシュラム退修会（第三回）には二六〇名という多数が参加して霊的訓練を受けた。その他各地の伝道会は勿論大いに盛り上がりを見た年であった。

（日本アシュラム連盟理事長）



理事長　海老沢宣道
編集人　白鄭二郎
発行人　大石嗣郎
定価　一部60円　〒80円

城北アシュラムに出席して、再確認したこと

習志野独立教会　杉田紀代子

会場の池の上教会は、昨年十一月に献堂されたばかりの、敷地面積三百坪の地に、地下一階、地上三階の鉄筋コンクリート造りの近代建築で、ほんとうに素晴らしいの一語につきるものでした。山根可弌という牧師先生が最初に伝道された教会が前身だそうで、このたび、山崎製パンの社長のお母様が、土地と建築資金の大部分を献げられて完成しました。

この恵まれた教会で、当日、関東一円から百名以上の教職、信徒の方々が集い、一日、慌ただしい生活から、しばし解放され、心を開いて、静かに聖書に聴き、聖霊の導きを受け、恵の交わりに充たされて、ほんとうに「イエスは私の主である」という、確信をいただいて帰りました。特に私はこのアシュラムで、次の三つの点を再確認させていただきました。

①当日の主題聖句

「わたしは全能の神である。あなたは私の前を歩み全き者であれ」創世記十七の一から、全能でいらっしゃる神様が「私の後からついて来なさい」と言われるのではなく、「私の前を歩いていきなさい」と言われるのです。それならば、主の導きを信じて、勇気をもって力づよく歩んでいこう。もし私の歩みが間違っていたならば、良き羊飼いでいられる主が、後からその間違いを正して下さるであろう。ただ主の御声を聞きとることが出来るように……と悟らされました。

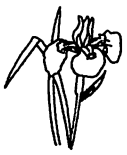
②アシュラムのプログラムから

アシュラムでは、いつもプログラムに一定の型があります。まず「開心の時」、これは主の前に自分から一歩ふみ出し、近づくこと。そして現実の姿（願い、祈り、罪など）を差し出すことです。マタイ伝八章一節～四節にある、らい病人の様にです。

次に「静聴の時」これは自分の願いや必要をしばらく置いて祈りつつ、ひたすら聖言によって主からのメッセージを聴く時です。この時に一つの聖言が以前とは違った新しい意味をもって、私の心に迫って来ることがよくあります。そして「福音の時」で、与えられた聖言から聖霊様の力をいただき、恵をいただいて、イエス様が今、私と共に生きて働かれるという実感を与えて下さいます。そして「イエスは主なり」との信仰が強められ、現実的生活の場へと再び出かけて行く時が「充満の時」と呼ばれています。このような順序でプログラムが進みますが、それに加えて「祈りの細胞」という時が有り、これはグループでお互いに自分の祈りの課題を出し合い、他者の為に祈り合うもので、もちろん、前提に内容は絶対に他に口外しないという約束があります。この「祈りの細胞」でいつも実感することは、私たちクリスチャンは、ぶどうの木のたとえのごとく、みんなイエス・キリストという大きい幹につながっている、一つ一つの枝なのだと思わされる事です。心の中で「どうぞイエス様、私たち一人一人の必要を満たして下さい。そしてあなたが崇められます様に」と祈らされます。

③アシュラムの精神から

最後のこのアシュラムの精神こそ、数多く行われるアシュラムの中にある最も大切なものと思うのですが、このアシュラムでの霊的訓練を通して、自分個人の霊的、肉的（現実的）生活に応用してこそ意味あるものとなるでしょう。実はこの城北アシュラムから帰ってしばらくして、私は出来るのかどうか、このことを実行してみようと決心しました。朝起きて、今日一日の生活がスタートする前に、まず主の前に静まり、心を開いて、主が語りかけられる聖言を、私自身に話される言葉として真実に受けとめ、「はい、イエス様わかりました。今日一日、おっしゃるようにいたします。どうぞそれをする力と、勇気を私に与えて下さい」と祈ることです。いうなれば私一人のミニアシュラムです。そして、一ヶ月以上経った今、確かに主は恵と真実をもって私に応えて下さっています。ある時は主人との言葉の行き違いから、ぎくしゃくした関係になっていた時、この朝の聖言への静聴によって、私の言葉や態度を聖霊様が良い方へと導き変えて下さったのです。ハレルヤです。又、子供達への思いわずらいも、聖霊様の働きを信じるこの朝のひとときに潔められ、主にゆだねて平安をいただきました。又、ある時は、主から病の床にある方を思い出させていただき、お便りを差し上げたり、他の時には、一日のうちの自由な時間の使い方にも、主は私の心を向けさせて下さいます。この様にして、本当に貧しく小さな私ですが、何よりも生きて働かれる主の御愛によって「主に受け入れられている」という実感をいただくことが出来、毎日を喜びと平安で満たして下さる主に、心から感謝いたしております。これからも、教会の皆様と共に「イエスは主である」という、信仰がいよいよ強められ、主と共に歩む毎日でありますように、お祈りいたします。



〈訂正〉

第一〇三号の③頁と④頁の写真は入れ違いでした。